

論文要旨

「近世のヴェネツィア共和国とオスマン帝国間の絹織物交易」

飯田巳貴

地中海は、古くから周辺地域を政治・経済・文化等様々な形で結びつけてきた。中世中期になると、イタリア半島の海洋都市国家が地中海交易に進出し、地中海地域内の交流が活発化した。ヴェネツィアをはじめとする海洋都市国家の商人は、東地中海地域のビザンツ帝国やイスラーム支配地域との交易を通じて繁栄し、その経済効果はイタリア半島北部の内陸にも及んだことは、これまで多くの研究によって実証されてきた。

従来の研究では、イタリアと東地中海を結ぶ地中海地域内交易は 15-16 世紀を頂点としてその後急速に不可逆な衰退に陥り、イタリア半島の都市国家にかわって、アルプス以北の北西欧諸国が地中海交易を含むヨーロッパ経済世界の覇権を握ったと考えられている。

実際 17 世紀の地中海交易は、二つの大きな変化を経験している。第一の変化は、主力商品にあらわれ、17 世紀にはアジア産スパイスのヨーロッパへの輸送の大部分は、主にオランダ船による喜望峰航路に移行し、イタリア商人のスパイス貿易に対する支配力は決定的に後退した。

第二の変化は、北西欧諸国船舶の本格的な地中海交易参入である。オスマン帝国は、北西欧諸国にも恩恵の特権待遇を与えてその交易を保護した。オランダ船やイギリス船はイタリア船に比較して造船費用が安く、航海・海戦技術にも優位であった。保護費用を含む輸送コストの面で、イタリア船による輸送は相対的な地位低下に陥り、イタリア船は次第にイタリア半島周辺の中短距離の往来が中心となっていった。

このように地中海地域内交易は、偉大な繁栄の過去を持つが、16 世紀末以降の重要性は低く、検討に値しないものと考えられてきたのである。

しかしヨーロッパと東地中海地域との交易における主力商品は、16 世紀まではスパイスであったが、17 世紀は生糸、18 世紀は綿に移行している。従って 17 世紀におけるイタリア商人のスパイス交易縮小を、イタリアと東地中海地域の結びつきの急速な衰退に直結させるのではなく、両者の関係が形を変えて存続した可能性も踏まえて検討すべきである。

問題提起の根拠は、ヴェネツィアなどの北イタリア諸国が 16 世紀後半から 17 世紀にかけて経験した経済の構造変化である。従来の研究では、17 世紀のスパイス交易の縮小は、

それを担ったヴェネツィアなどイタリア諸国の経済的衰退と不可分のものとされ、17 世紀以降のイタリアは不可逆的な衰退に陥ったと考えられてきた。しかし近年では、海上交易にかわって輸出向け奢侈品製造業とそれに直結する養蚕や桑栽培などの農業部門が成長し、経済の急速な衰退をある程度まで回避することに成功したとする見方が主流となっている。

地中海交易によって繁栄してきたヴェネツィアでも、市内の絹織物製造業やガラス製造業、印刷出版業、大陸領土の養蚕、絹撚糸製造業、絹織物製造業が成長した。17 世紀には商品作物栽培（桑、米作、養蚕等）を目的とする、ヴェネツィア貴族層による大陸領土の土地への投資が活発化した。

また 17 世紀の地中海における生糸交易にもイタリア商人は関与した。ペルシア産・シリア産の最高級生糸は、中世から地中海地域内交易の主力商品のひとつであった。17 世紀においても生糸の大部分は地中海を通じてヨーロッパに輸出された。17 世紀にはアナトリア西部で養蚕が本格化し、ペルシアおよびシリア産生糸と共に、16 世紀までのスパイスに代わってヨーロッパ諸国による東地中海地域との交易の主役となった。

ヨーロッパ商人が生糸の買い付けに訪れる主要な集散地は、ブルサ、アレppo、イズミルであった。ヴェネツィア商人はアレppo 生糸取引市場で大きな力を維持しており、17 世紀においても地中海交易で重要な役割を果たしている。

このように 17 世紀のヴェネツィア経済は、海上交易に代わって絹産業など農業・製造業の割合が高まったが、ヴェネツィア製毛織物および絹織物の主要な輸出先は、オスマン帝国が支配する東地中海地域であったことが、これまでたびたび示唆されてきた。同様の事例は、フィレンツェの毛織物・絹織物製造業研究でも言及されている。ヴェネツィアと東地中海地域は、生糸交易でも関係を維持しており、17 世紀のイタリアと東地中海地域は、中世以来続いたスパイスを中心とした交易とは異なる形で、「伝統的な」経済的結びつきを維持していた可能性が提示されている。

絹織物を介した 17 世紀ヴェネツィアとオスマン帝国の交易は、ヴェネツィア絹織物製造史研究やオスマン帝国の染織史研究において、主に叙述史料をもとに示唆されるにとどまっている。その理由として、17 世紀地中海地域内交易に対する歴史観に加えて、比較的まとまった史料が得やすい製造業史研究が主流となって先行し、流通や消費の分析が遅れていることが挙げられる。また絹織物は奢侈的性格を持つ商品であり、コストパフォーマンスの尺度で測ることが難しく、商品は細分化され、いわゆる一物一価の法則が当てはまらないことが多い。それ故に、経済史研究では、奢侈品の需要、製造、流通の分析は、概ね生活必需品や工業原材料のそれと比較して遅れをとっている。

しかし 17 世紀ヨーロッパ社会を解明する重要な鍵のひとつは、奢侈品の顕示的消費である。各地に宮廷を中心とした貴族文化が育ち、儀礼と恋愛が国家の中枢で大々的に展開した。衣服から食事、調度品、邸宅、庭園、音楽にいたる様々な奢侈品は、舞台装置として人々の振る舞い（とその意図するところ）を一層効果的に演出した。奢侈品が果たした社会経済的役割は、非常に大きかったのである。

本論文ではこうした問題意識に基づき、17 世紀におけるヴェネツィアとイスタンブルを中心とするオスマン帝国との絹織物を軸とした交易について、一次史料を用いて実証的に検討し、これまでの研究史で欠落していた部分の、少なくともその一部を埋めることを目的とした。

ヴェネツィアとオスマン帝国を事例として取り上げた理由は、第一にヴェネツィアは、中世以来、イタリア半島のなかでも傑出してビザンツ帝国やイスラーム世界と商業・外交・文化の交流を通じて結びつきを深めてきた。第二に、かつてヴェネツィアは 17 世紀イタリア衰退説の代表格であり、1980 年代以降は奢侈品製造業をキーワードとする再評価において、活発な議論が展開されている。第三に、17 世紀のヨーロッパにおける最大級の宮廷、首都人口、富裕層は、オスマン帝国の首都イスタンブルにあった。絹織物を介したヴェネツィアとオスマン帝国の交易関係は、近世地中海地域内交易圏のみならず、奢侈品製造や消費が各々の社会経済において果たす役割について再考する手がかりも提供すると考えられる。

本論文の具体的な課題は以下の 3 点である。第一に、17 世紀のオスマン帝国、特に首都イスタンブルの繊維製品市場の実態を可能な限り時系列的に分析する。そのなかでヴェネツィア製品を競合製品と比較し、前者の位置づけを明らかにする。

第二に、絹織物を介したヴェネツィアとオスマン帝国間の関係を、17 世紀を中心に、中世後期から遡って分析する。ヴェネツィア製絹織物の輸出がオスマン帝国の絹関連産業に与えた影響についても考察する。

第三には、17 世紀のヴェネツィアとオスマン帝国が絹織物交易を介して結びついた要因を考える。製造技術や商人の販売努力が想定されるが、本論文ではそれに加えて、人間社会において絹織物が関わる重要な場面のひとつである顕示的消費を、需要の源として取り上げる。

ところで製造業の分析が一定の成果を重ねる一方で、流通・販売・消費市場の分析が遅れてきた背景には、伝存史料の問題もある。イスラーム世界とイタリアでは、国家の制度や政策、商業慣行に大きな相違があり、広い意味での文化的な違いから、作成・保管され

る史料の相違が生じた。

中世後期以来、北イタリア諸都市では帳簿や契約書などの商業に関する私的史料が大量に作成・保管された。ヴェネツィアにも多くの商業関係史料が伝存するが、共和国末期まで個人経営が主であり、商業関係史料の大半は基本的に個人単位で作成され、伝存も系統立っておらず、かなり散発的である。その点、英蘭仏などの北西欧諸国は近世には国家に認可を受けた特許会社のもとでレヴァントやアジアとの海外貿易が営まれ、まとまった形で史料が残る。またヴェネツィアでは、主に航海毎に共同出資を清算する航海勘定が主で、会社組織のように長期間取引に関する史料が作成・保管されることは少なかった。

一方前近代のイスラーム世界に関しては、商取引に関連する史料の伝存例そのものが少ない。例えばオスマン帝国では、広い領土を支配管理するため作成された膨大な文書および帳簿が 1 億点以上伝存する。しかし国家財政関連の膨大な公文書にひきかえ、商取引など私文書の現物の伝存例は極めて希少である。中央（イスタンブル）に残る帳簿の記載内容はほとんど合計・総計で記入され、大半は細目不明であり、地方に関する伝存例は一般に少ない。

イスラーム法では、売買において証人の立会や文書契約は義務ではなく、動産の売買は通常口頭の契約で済まされる。司法制度上も契約書や帳簿などの役割は非常に小さく、商取引（特に動産）に関わる文書の作成や保存は重要視されなかった。またイスラーム世界では一般に数世代存続する商人家系が少ないことも、商業関係史料の伝存状況に相当の影響を与えている。こうした商業慣行によって、オスマン帝国に限らずイスラーム世界では、商取引、なかでも動産の売買に関する契約書の伝存は特に少ない。

一方イスラーム世界ではユダヤ教徒、キリスト教徒、アルメニア教徒も活発に商取引に参加しており、非ムスリムが残した商業関係文書から商取引の実態を分析することは可能である。

本論文は 3 章から構成される。第 1 章では、主に先行研究に依拠して、イスタンブルを中心としたオスマン帝国社会における奢侈品消費のありかた、そのなかで絹織物が果たした役割について概観した。オスマン帝国では毎週の君主の行列や各種の祝祭、宮廷行事等に莫大な費用をかけた。顕示的消費は単なる個人的な贅沢ではなく、帝国の威容と富を帝国内外に知らしめ、それによって支配の正当性を認識させる事を目的とした政治的に不可欠な舞台装置であった。

古来より富のイメージと深く結びついてきた絹織物は、衣服、敷物、贈答品等の形で重要な役割を担った。特に外交および宮廷の慣習であるヒルア（恩寵の御衣）は、その内容

によって贈った者と受けた者の支配・被支配関係や好意・不快・敵意を示し、オスマン宮廷に集う外国領事は、自国他国の使節に送られるその数と質に神経を尖らせた。

イスタンブルでは、絹織物は大バザールのベデステンを中心に商われ、歴代のスルタンや高官がワクフ（宗教寄進）に設定したベデステンやハーン、絹織物や繊維製品の名前をもつ小道が大バザールの内外に開かれた。

第2章では、17世紀前半にオスマン帝国で作成された3点の公定価格（ナルフ）台帳を分析した。その結果、イスタンブルでは厚地の高級絹織物への言及が最も多く、奢侈品消費への関心の高さが認められる。1600年と1640年のイスタンブル台帳を比較すると、後者は記載された絹織物の種類が増加し、17世紀半ばにかけて奢侈品市場の成長が示唆されている。

イスタンブルにおける絹織物の消費傾向は、1624年のブルサ台帳と比較すると一層明確になる。当時のブルサはアナトリアを代表する地方都市であり、商品の大集散地でもあった。ブルサのナルフ台帳に見られる絹織物の種類は、イスタンブルに比較すると高級品が少なく、中級・下級品の割合が高い。その背景には、宮廷や高官などの富裕層が集中するイスタンブルと、地方都市との消費文化や経済規模の違いがあったと考えられる。

絹織物の産地は帝国内外に広がっているが、毛織物や綿織物と比較すると、産地の分布が若干西寄り、つまりヨーロッパ寄りであった。16世紀なかば以降のオスマン帝国では、イタリアを主とするヨーロッパ製絹織物の輸入は、帝国財政を揺るがすものとして非難され、その対抗策としてイスタンブルでの高級絹織物製造が振興されてきた。しかし第2章の分析からは、17世紀前半においても、多くのヨーロッパ製（実態はイタリア製が主であると考えられる）、およびヴェネツィアやフィレンツェ等イタリア製の絹織物が、イスタンブルやブルサの市場で、相当の人気を得ていたことが示された。

ナルフ台帳には、中世以来ジェノヴァの支配を受けて絹織物製造の技術が伝えられたキオス製の絹織物の記載も多く見られる。キオス製絹織物の人気は、イタリア製絹織物に対する需要の大きさを裏付けているともいえる。

オスマン帝国で流通し、台帳に記載されたヴェネツィアやフィレンツェの絹織物は高級品にとどまらず、1624年のブルサ台帳、1640年のイスタンブル台帳では、これらの産地の名を付けた薄地絹織物や綿絹交ぜ織りが記載されている。16世紀以降、北イタリア各地の絹織物製造業では、従来の重厚な高級絹織物製造に加えて、比較的安価な軽量（薄地）な絹織物や交ぜ織りが次々と開発されてきた。上記2点の台帳の記載内容は、その成果の現れであるといえよう。

第3章では、16世紀末から17世紀初めにかけてヴェネツィアで作成された公証人文書（海上保険契約書）を分析し、当時ヴェネツィアの海上貿易では、オスマン帝国市場（イスタンブル、ラギーザ、イズミル、アレクサンドリア、シリア）はもっぱら毛織物、高級絹織物を中心とした繊維製品の輸出先であったことが確認された。高級絹織物輸出は世紀後半も続いたことが、他の史料からも確認されている。

ヴェネツィアをはじめとするイタリアの絹織物が、近世のオスマン帝国市場に流入したことは、オスマン帝国の絹織物産業史においても問題を喚起してきた。イタリア製絹織物は、オスマン帝国市場を独占していたわけではないが、その存在は大きく、ブルサ等オスマン帝国の地場産業に与えた影響力は無視できない。しかし第3章での分析の結果、17世紀におけるヴェネツィア商人の生糸購入の中心はシリアのアレッポであり、ブルサ生糸購入市場におけるヴェネツィアの影響は、既存研究で言及されてきたほど大きくなかった可能性が示された。

以上が本論文で行なった検討の概略である。本論文の特徴は、17世紀のヴェネツィア絹織物製造業とオスマン帝国市場の関係をオスマン帝国とヴェネツィア双方の史料を用いて新たな視点で分析したことにある。両史料の分析結果は、かなりの部分で符合することが確認された。17世紀前半の公定価格台帳の分析は、オスマン帝国市場で高い評価を受けるヴェネツィア製絹織物は高級品が中心であることを示す。一方でヴェネツィアの公証人文書から、ヴェネツィアからオスマン帝国市場への輸出品は、毛織物および高級絹織物が大半を占めたことが確認された。

本論文の分析により、17世紀の絹織物を介したヴェネツィアとオスマン帝国間の取引について、これまでヴェネツィア史とオスマン帝国史に分断されてまとまった形で提示されることがなかったばらばらの像を、ある程度まとまって描き出すことができた。中世以来の地中海地域内取引は、17世紀においても、形を変えて存続していたのである。

それでは、ヴェネツィアをはじめとするイタリア製高級絹織物が、オスマン帝国、特に首都イスタンブルで成功した要因、つまり両者を結びつけたものは如何なるものであったのか。これまでもイタリアの製造業者がオスマン帝国に駐在する代理人を通じて消費者の嗜好を調査し、デザインや規格をオスマン帝国市場好みに仕上げた製品を製造・販売したことが指摘されてきた。イタリアでは奢侈品生産の産地間競争が激しく、各国政府は保護貿易政策を採用し、戦争や自国製造業の発展によりヨーロッパ市場を失ったイタリアの製造業者が、オスマン帝国市場に向かったとも考えられてきた。

さらにヴェネツィアとオスマン帝国双方が、絹織物等の奢侈品消費に対して、ある程度

共通の認識を持っていたことが想定される。17 世紀のオスマン帝国は、当時のヨーロッパで最大級の都市人口、宮廷、富裕層を抱えていた。特に首都イスタンブルや君主の滞在先では、顕示的消費は必要不可欠な政治的な舞台装置であった。顕示的消費を支配の重要な要とみなす習慣は、帝国の経済・財政状態（の悪化）と連動することなく、帝国崩壊時まで維持され、重厚な絹織物に対する需要は、宮廷人の服装が西欧化する 19 世紀初めまで維持された。

オスマン帝国のスルタン・宮廷・富裕層による顕示的消費の源流のひとつは、ビザンツ帝国にある。1453 年にコンスタンティノープルを攻略した「征服者」メフメト 2 世は、アレクサンドロスやローマ帝国の後継者と自認し、ビザンツ帝国から世界帝国のイメージを継承したと自負していた。実際、衣食住に加えて様々な場面でビザンツ帝国の文化、伝統、技術がオスマン帝国社会に相当程度継承されていた。ビザンツ帝国では支配者とその周辺には常に豪華さが求められ、皇帝が独占した貝紫の絹布など、奢侈品の贈答は内外の政治折衝に用いられた。ビザンツ帝国における豪奢と支配のイメージの結びつきは、確実にオスマン帝国に受け継がれた。

一方ヴェネツィアは、中世中期以来ビザンツ帝国やイスラーム世界と地中海の海上交易によって深く結びつき、その過程で東地中海世界の文化に通じていた。ヴェネツィアは名目上はビザンツ帝国皇帝を君主とした。伝承ではビザンツ帝国からきた職人によってヴェネツィアに絹織物製造技術が伝えられた。ヴェネツィアは「コンスタンティノープルの長女であり、後継者である」といわれ、政治・経済・文化等の多方面にわたりビザンツ帝国からオスマン帝国に受け継がれた東地中海地域の顕示的消費を重要視する文化に接し、また自らのなかにも取り入れてきた。市内には数千人規模のギリシア正教徒の共同体が存続し、オスマン帝国から多数のギリシア正教徒の商人や職人、留学生、ムスリムやユダヤ教徒の商人が往来・定住した。長年の経験に基づく東地中海地域の嗜好に対する理解と、少なからぬ共感もまた、17 世紀においてヴェネツィア絹織物製造業がオスマン市場の嗜好に対応しえた理由のひとつとも考えられる。交易はもの、ひと、かねだけではなく、文化や情報などのソフトパワーの移転をも促す。中世から続くヴェネツィアと東地中海地域との多方面にわたる結びつきは、近世においても形を変えつつ両者の紐帯を支えていたともいえよう。

一方で多くの不明な点が今後の課題として残った。例えばオスマン帝国市場の需要に対してヴェネツィアの絹織物製造業が対応したのならば、市場の情報を把握し製造現場に生かした担い手は、セタイオーリ（絹織物の織元）か、貿易商人か、それ以外の働きかけか

あったのかという問題である。

本論文では 16 世紀末から 17 世紀前半に関する数点の史料を分析したに過ぎない。今後の課題は、引き続きオスマン帝国とヴェネツィア双方の史料を利用して、本論文で分析した各史料間の間隙を埋めることである。絹織物を介したヴェネツィアとオスマン帝国市場の貿易関係は、フィレンツェとオスマン帝国の関係にも共通点が見出され、その研究を参照することで、単なる二国間貿易の枠組みを超えた歴史像を提供する可能性も示唆している。また本論文で検討の対象としたのは、オスマン帝国のなかでもイスタンブルやブルサを中心とするごく狭い地域に限られている。今後は他の地域にも検討の対象を広げること、近世の社会経済をより深く解明する手がかりが得られるであろうと考えている。